

同時テロ後まもなく、ニューヨーク市を訪ねた

三浦 仁

「展望台」(Observation Deck)

2001年秋、我が家の書斎にしている部屋から、一枚の英語で書かれたパンフレットが見つかった。そこに、The closest some of us will ever get to heaven. という文句が書いてあった。意識すれば、「私たちにとって天に最も近い場所」とでも言うのか…。それは、私自身がニューヨークの世界貿易センタービル（以下、WTCと表記）を訪ねて、屋上の「展望台」に上った時に、入場券と共にもらったものだった。

1981年の夏、初めてアメリカへ旅行した時、以前から行きたかったニューヨーク市（以下NY市と表す）を訪ねた。この街を訪れた時の印象は、それまで茫洋としたミシガンの田舎にいたりしたため、初めて日本人が都会と呼ぶような人ごみのする場所へ来た、というものだった。聳える摩天楼の下、道行く人や商店の賑わいにとても活気があって、心がうきうきする感じだった。刺激に満ちた街だった。

8月下旬のある晩、宿舎だったセントラルパーク西側の学生用ホステルを出て地下鉄に乗り、マンハッタン島の南端ロウアー・マンハッタンを目指した。地下鉄の駅を出て、WTCの南棟2階に上がった。そこに107階へ直行する、「展望室」行きのエレベーターが待っていた。

NY市に来たら、摩天楼の一つでも登ってみたいと思っていた。しかし根がひねくれ者の私は、日本人になじみのエンパイア・ステート・ビルには行かず、それよりも高く地上410mにそびえるこのビルから、夜景を眺めようとしたのだ。

少し揺れ動く感じのするエレベーターにスリルを覚えながら107階まで登ると、その展望室からは外の景色をガラス越しに見ることができた。しかしマンハッタンの夜景の醍醐味を味わう



図1 ニューヨーク市マンハッタン島

には物足りない。そこでさらに階上の、ビルの陸屋根に回廊状に造られた「展望台」へと出てみた。扉を開けた所で前の行列に行く手を止められた。よく見るとその前に防風着を来た警備員の青年が、トランシーバーをもって待機している。彼は上空の風が強いので見学客を外に出すタイミングを見計らっていた。気を張る仕事なのか、その緊張した表情と鋭い眼差しが印象に残った。実際、外の風は強く、半袖シャツでは寒さを感じるほどだった。しばらくしてゴー・サインが出たようで、列が前に動き出した。こうして漸く「展望台」にたどり着いた。

そこではやはり、北側の景色が印象に残った。それは右手に黒い帯のイースト川、左手にも同様のハドソン川を従え、NY市の摩天楼の中心ミッドタウンを眺める方向だったからだ。ミッドタウンには、数多くの超高層ビルが並び建つ。右前方には平たい壁のような国連ビル、その左奥に鉛筆の先のようなクライスラー・ビル、そして中央やや手前にこの街の象徴と言いきエンパイア・ステートが、塔屋をぼーっとライトアップされてそそり立っていた。遠く目をやるとハドソン川の西には、ニュージャージー(NJ)州の住宅街が光の砂粒の様になって広がっていた。NJ、NY、コネティカットと、三つの州にまたがったトライ・ス

テートエリアと呼ばれる NY 都市圏の大きな広がり、実感することができた。

こうした絶景を楽しめたのも、それだけ WTC が超高層のビルだからなのだ、今考えれば分かる。ここロウアー・マンハッタンでは周囲に比肩する高さのビルを持たず、ミッドタウンから離れた位置に立つ WTC は、それだけにこの地区では目立ち、何かの標的にされたら格好の対象になりそうな存在だった。実際、93 年 2 月には「イスラム原理主義者」の爆弾テロにより、ビルの損壊と犠牲者が出る事件があった。

そして 2001 年 9 月 11 日、あの乗っ取られたジェット機によるビルへの突入という大事件が起こった。

同時テロ事件への関心

11 日朝起きた事件は、日本時間ではその晩の 10 時過ぎであり、私はインターネットのニュースを閲覧していてこれを知った。もちろん大変な事が起こったと直感した。93 年の爆破テロを思い出し、恐らく今度も事故ではないだろうと推察した。しかし、その日睡眠不足でとても眠かった私は、翌朝の知らせを待つことにして寝入ってしまった。翌朝、目が覚めてからニュースを見た時、時々刻々入って来る情報は、NY 市では二機ジェット機が WTC に突っ込み、その他ワシントンの国防省にも同時に突入した。さらに 1 機がテロに使われる寸前に何らかの理由でペンシルヴェニア州に墜落した。と言うものだった。そしてテロリストの予想さえ越えただろう WTC の南北両棟のビル倒壊が、これに続いた。

まず思ったことは、現場となったロウアー・マンハッタンが実際どんな修羅場と化したのかということだった。5000 人近い犠牲者が出る惨事とはどんなスケールだったのか、想像しても今一ピンと来なかった。そして犠牲者とその家族の思いとは、どんなものだったのだろう…。外国のこととは言え、NY 市には何度か出かけていたし、



写真1 遠くから見る世界貿易センター跡地

そこに暮らす人々の息吹と言ったものに触れたつもりでいた私には、ただの他人事とは思えなかった。その後、この痛みを共有するつもりで、消防士の犠牲者のための募金にも応じたし、できればロウアー・マンハッタンの現場を訪れたいという思いがつのって行った。

一方、アメリカ政府はテロリストの首謀者をウサマ=ビンラディンと断定し、それをかくまうアフガンのタリバン政権を打倒するため、戦争に踏み切った。テロ事件は、日本の外交や安全保障にも関わる重大な問題を我々に突きつけた。この間、本校の社会科でも様々な是非論が飛び交った。2 学期を通じて、この件で話が出ない日はないくらいだったと言える。

ニューヨークへ行くことに

世界史を教える身の私としては、この世界を震撼させた事件の現場にぜひ行きたいと思い、10 月には早々と年末の NY 市行きを決めた。それからは、いつもと同じ旅行のための準備が始まった。航空券の手配はなじみの旅行社でユナイテッド航空の 12 月 26 日出発の便を確保した。ユナイテッドは事件に利用され痛手を受けた航空会社で、それへのエールのつもりもあった。もちろん、値段の安さもあったのだが…。

ホテルはこれまでの予約とは勝手が違った。今までは予約なしかあるいは最初の 1 泊だけ、現地のホテルに直接電話を入れてとっていた。今回はインターネットで探すことにした。自身の拙い英語でやりとりするより確実だと思えし、何より

情報が豊富だったからだ。時間が貴重なので同じ宿に連泊し、かつ交通至便のマンハッタン内に確保すること。14%のホテル税も含めて一般にNY市では宿泊代が高価なのでなるべく安価なそれを探ることが条件だった。

事件後目を通す事が多くなったニューヨーク・タイムズ(New York Times)のサイトから検索して行くとエクスペディア・コムという旅行情報のそれが見つかり、125ドルと決して安くはないが、普段の半額で提供しているホテルがのっていた。場所もレキシントン街の51丁目で、ミッドタウンの東に当たる地区だった。そしてここにした最後の決め手は、この旅行情報の「アイラヴNY」と名のるキャンペーンのアピール文に、以下のような文句が書いてあったからだ。

「ニューヨークを応援してくれる皆さんが出来ること、それはここへ来て宿をとり、お金を落としてくれることです。」NY市長、ルドルフ＝ジュリアーニと…。

こうして、コンピュータ上でクレジット・カードの決済を行い、その確認のEメールを印刷して控えとして携え、暮れの26日、成田からNY市への機上の人となった。

真冬のニューヨークに降り立つ

日本を立ち10時間近くも時が流れた時、私は久々に北米大陸の上空まで来ていた。窓側の席だったこともあり、五大湖地方に行くユナイテッド機からは、湖と大地の風景がまるで絵地図でも俯瞰するように、はっきりと眺められた。そしてナイアガラ瀑布の川下に位置するオンタリオ湖を通りすぎた時、大地が雪に白く覆われているのに気がついた。

ところがどうだろう、NY市に近付くにつれて、その雪景色もまばらになり、やがて消えてしまった。天気は快晴となり、ケネディー(John F. Kennedy)空港に着陸する航路に入った頃には、見覚えのあるNY市の中心、マンハッタン島がはっきりと望見された。長方に切り取られたセントラル・パークの空地やその南に控えた摩天楼の屹

立するビル群を見つけた時、とうとうNY市に着いたのだという実感をもった。

NY市の冬は意外にも日本の太平洋側の冬に相似していた。北西の風が吹いて寒いが、五大湖を通りすぎた所で雪はNY州北西部の山塊に当たり、降りつもってしまう。だからこの都会には、真冬の東京と同じように冷たく乾いた風が吹くのだ。滞在中、ナイアガラの川上になるエリー湖岸のNY州バッファローからは、豪雪のニュースが伝えられていた。ところがこの都会は晴天が続いた。それでも日本と明らかに違うのは、大気の冷たさで、連日朝の気温が華氏30度位(摂氏だと氷点下2度位)にまで下がることだった。

無事着陸したユナイテッド機は、その専用とするターミナル7に機体を付けた。快い緊張を抱きながら、建物を階下に降りて入国手続きを済ませ、カウンターに頼んで乗合タクシーを呼んでもらい、目指すミッドタウンのホテル・メトロポリタンへと向かった。

タクシーは、以前にケネディー空港からマンハッタンを目指した時と同様、クウィーンズのジャマイカ地区を抜けて行く。大きな総合病院があってランドマークになっているが、その病院も2000年まで続いた好景気で、すっかり立派なビルに建て替わっていた。この時期、夕方の5時頃になるとすぐに宵闇が迫って来る。イースト川を渡りマンハッタンに入る頃には、この都会はすっかり闇の下にあり、エンパイア・ステートビルのライトアップされた塔屋が、青白い光を夜空に浮き上がらせているのを、川のはるか手前から眺めることができた。

ホテルにチェック・インし、部屋に荷を置き階下に降りると、まずは日本の我が家の子供たちに電話を入れる。時はすでに午後6時近く、日本にかけると翌日の午前8時となる。「どうしてる」という会話の後で、「まずは、クリスマス明けの街の様子を見て来る」と伝えて電話を切った。

クリスマス・デコレーション

宿舎のホテルは、ミッドタウンのレキシントン街にある。南北の通り（Avenue）で言うと、そこから西にパーク街、マディソン街、5番街、アメリカ通りとも呼ぶ6番街、そしてブロード・ウェイと並んでいる。この辺りは大体検討がつく土地なので、足取りも軽やかに夜の街に繰り出す。クリスマスが終わって直ぐの26日なので、予想していた通り、街は至る所でそのデコレーションに飾られていた。中央に分離帯があるパーク街では、その分離帯の丈の低い木々をツリーに見立て、点滅ランプを仕掛けてあった。そこを通り過ぎた所に、セント=パトリック大聖堂があった。周り的高層ビルに負けないぞと、ゴシックの塔をそびえさせてデンと構えている。正面は西を向いて繁華な5番街に面しているが、南側の扉からそっと入ってみた。

ところがどうだろう、クリスマス休暇が終わっていないこともあり、堂内は大勢の観光を兼ねた信者でごった返し、こうした空間に求められる静謐さとは縁遠い世界だった。ここはニューヨーク子に多いアイルランド系の信者の守り神、聖パトリックを祭った会堂で有名だ。カトリック教会ということでイタリア系など南ヨーロッパ出身の訪問客が多いようで、交わす言葉もイタリア語が混じっていたりする。そうかクリスマスに有名な寺院にお参りする、これは日本人ならさしずめ新年の初詣に当たるのでは、と思いが当たった。

聖堂を正面から出て5番街を渡ると、これも有名なロックフェラー・センターの地区に入る。超高層ビルが並び立つビジネス街だが、その中心ロックフェラー・プラザは地下階まで長方に屋外になっていて、冬季はスケート場となっている。この上に名物のクリスマス・ツリーが立つので、是非一度見ておきたかった。ここはセント=パトリック以上の賑わいで、ツリーに飾られた光のイルミネーションも眩いばかりだった。プラザを見下ろすと、あの純白の氷に輝くスケート場が見下ろせる。そこには休暇を楽しむアベックや家族連れ

が大勢集って、氷上に円弧を描いていた。



写真2 ロックフェラー・センターにて

この晩、自分が出会ったものは、テロリストに狙われた「惨劇の街」の傷跡ではなく、人生を明るく生きようとするニューヨーク子の姿だった。多様な民族が集まって出来た国を象徴するように、ここを訪れている人々の顔には、中国語を話す東洋系あり、暇があればラップを踊りだしそうなアフリカ系あり、ラテン・アメリカ出身のヒスパニックも白人家族のそれもあった。思い思いにこの場の楽しさに浸りながら、年末の休暇を楽しんでいた。

貿易センタービル (WTC) 跡の現場へ

翌27日朝、時差ぼけで眠たい目をこすりながらベッドから抜け出すと、まずは腹ごしらえにとホテルから1ブロック北に開いていたパンとピザの店でパウンドケーキとコーヒーをテイクアウトし、これを部屋に持ち込んでの朝食となった。

今日は早速、事件現場を見に行こうと計画していた。テレビのローカル・ニュースには、今朝もWTCの現場からの中継が入り、除去作業に当たる車の行き来が見えた。

外に出たついでに買って来た部厚いNYタイムズには、行方知れずのウサマ=ビンラディンが自分を映したビデオテープを送って来たニュースがトップになっていた。そして事件以来続いている「挑戦される国民」(A Nation Challenged)というページには、今日も新たに死亡認定された犠牲者のプロフィールが、何人も、何段にも渡って書かれていた。

ホテルは地下鉄6号線の駅にほぼ直結していたので、そのままロウアー・マンハッタンの方、即ちダウタウン方面への電車に乗った。9時は過ぎていたが、列車にはかなりの客がおり、その中でもアジア系の人々が目立った。その列車を途中で急行に乗り換え、多分この辺りということで降りたのが、ウォール街&ブロードウェイという駅だった。

地上に出ると、そこは文字通り駅名にある二つの通りの角だった。ブロードウェイの西側には、ウォール街に正面を向けてトリニティー教会が鎮座していた。街頭の地図でWTCの位置を確認し、そこからブロードウェイを北に向かう。教会から歩道沿いに続く壁には、犠牲者を悼む各国の人々からの寄せ書き、ポスター、旗やペナントなどが貼ってあった。それを見入る人々、これもまた私と同様遠くから、そして外国から来た人々が多かった。皆カメラを手にしているのに苦笑する。

最初の左からの道の角に来ると、そこにロウアー・マンハッタンでは有名なDAIKICHI寿司の店が営業を再開していた。11月半ばにようやく開店したが、以前のようにこの辺りの金融会社の社員が昼休みにつくる行列はまだ戻って来ないという。それもそのはず、ここから西側には立ち入り禁止の柵が設けられ、以前の平和な光景とは大きく異なっていた。店の張り紙には、通ってくれるお客様に感謝して、「昼時にはいつもの20%引きで寿司と弁当を販売します」と出ている。

行く手の左前方がWTCの跡になる。この歩き方だと時計と反対周りにその現場を垣間見ることになりそうだ。そして左側に入る道はまず立ち入り禁止となっている。結局ブロードウェイを歩き続ける。行く手の左側に、また一つ教会を認める。先のトリニティー教会が管理するセント・ポール寺院で、そこまで来て左側の道に工事中の木造の緩やかなスロープを認めた。なるほどと思った。日本を発つ前の新聞に、近くWTCの跡が見渡せる「展望台」ができるとあった。それに付いていた写真とも一致する。



写真3 工事中の「展望台」

すでに特別の許可をとった関係者が家族連れで入場を許され、そのスロープを上り詰めた先に立ち、撤去作業の続く現場を眺めていた。私の関心事は、ここの一般公開がいつになるかだった。柵の内側で警備しているのは、身内に犠牲者の出たニューヨーク市警(NYPD)の警察官だった。誰かがその時期を訪ねていたが、職務外でらちが明かない様だった。日本を立つときの情報では明日金曜日とあったが、遅れているのは確かだった。滞在中に公開されるようだったらぜひ来ようと思ひ、その場を離れた。

セント・ポール寺院は工事関係者のみに提供されているらしく、中に入れなかった。聖堂の柵には、現場で行方知れずになった犠牲者の写真が掲げてあったり、遠く日本からの千羽鶴が数多くかけてあったりした。ここがテレビによく出てきた追悼の現場の一つなのだと、気がついた。

聖堂の1ブロック先、ドラッグ・ストアのウルワースが建てたビルの所で左に曲がり、しばらくオフィス街だった通りに行く。両側のビルには昼間だと言うのに人影がなく、まだゴーストタウンの様だ。その中で行く手の左側にあったカトリック教会のセント・ピーターだけは、多くの参拝・見学客を集めていた。そのギリシア神殿風の正面から階段を上り中に入って、しばし暖をとらせてもらった。そして、蝋燭がくゆる堂内をしばらく巡った後に外に出た。この建物のすぐ向こうに工事車両が行きかう現場がある。しかし、ここでも水平の位置からしかそこを見ることはできな

った。

その先は封鎖地区が北に広がり、ただでさえ現場に近付けない中で、遠巻きの迂回路を行かざるを得なかった。証券会社・銀行・保険とロウアー・マンハッタンのこの地区は、ウォール街に隣接して金融街 (Financial District) として知られる。しかし、それらの多くが戻って来ていない。逆に言えば、代わりにのオフィスを見つけてここを離れた状態だった。

ハドソン川に近い WTC の西側は、やって来る人もまばらで、ホテルもまだ再開せず閑散としていた。そもそも、封鎖されている地区が広がった場合、このハドソン川に達しているかもしれない。現場をぐるりと回れないことになる。そう思ってここまで来る人が少ないのかもしれない。しかし実際には、水際近くを通るものの、WTC の西側、ワールド・ファイナンシャル・センターと呼ばれるビル群を境に、その外側の通行は可能だった。

この辺りは埋め立てた土地に都市計画を敷いてできた地区で、歩行者の行く道はハドソン川沿いのきれいな公園の中に行く。ロウアー・マンハッタンのハドソン川は、そのままニューヨーク湾に注ぐので川と言うより海といった姿だ。対岸のニュージャージー州がはるか向こうに見えた。以前には見られなかったオフィス・ビルがその川沿いに建ち並んでいる。そういえば、WTC に入っていたため犠牲者を出した富士銀行 (現みずほ銀行) が、事件直後から川の向かい側のバックアップ・センターに移ったと聞いていた。それが多分あの新しいビル群の一角なのだろうと検討がついた。

ファイナンシャル・センターの建物は、ウィンター=ガーデンと呼ばれる中庭を覆う半円筒形のガラスの大屋根を持ち、一目でそれとわかる。WTC と道一つ挟んで隣同士なので、ここの被害も相当なものだっただろう。しかし、反対側から見ると限りガラスには別状ないようで、問題なのは現場に近過ぎて封鎖が完全にとけないことではなかった。センターが出来たとき、ここにボート

を係留するための小さなマリーナを作った。そこだけ道は内陸に迂回するようになっていた。

再び人の往来が増えて来た。丁度四角いマリーナの南東隅に、屋根代わりにテントを張りそこに供えられたものを守っている場所があった。セント・ポール寺院前で見えてきたのと同じかと覗くと、ここは事件で犠牲になったニューヨーク市消防局 (NYFD) と市警の犠牲者を弔う記念の場所となっていた。消防局は三百人近くの犠牲者を出したので、組織としての被害の規模は計り知れないものがあつた。マンハッタンやイースト川の対岸ブルックリンの消防署は、それぞれの顔写真を並べた故人を顕彰する掲示物を出していた。傍らには鎮魂の蝋燭も置かれていた。ブロードウェイ沿いと違い辺りは静かで、ここに来て漸く敬虔な気持ちになることができた…。

その先にも現場を視察する際のスポットの一つがあつた。しかしやはりここも公開していない。武装して迷彩服を着ている陸軍の兵士が立ち、やけに物々しい雰囲気だった。ここから先、たどる道はハドソン川を離れ、歩き始めたブロードウェイの方向に戻るようになる。WTC の南側は、北側と比べ高層ビルが多く道幅も至る所で狭くなる。そうした道を縫うようにして、最初に見たトリニティー教会の裏側まで戻ってきた。2時間近くがたっていて、どうやら体は外の寒気に当てられたようだった。ちょうど良いところにイタリアン・スタイルのスープの店が開いていたので入った。目に止まったのは、ステンレスの大なべに入ったクラムチャウダーで、これを喉から通すといくらか体の温かさが戻って来た。

トリニティー教会で

ウォール街に面するこの教会は、現代的なビル群の中にあつて一際、古き良き NY を思い出させる。今でもロウアー・マンハッタンでは目立つ存在である。現場の周りを一周した後でこの教会に入ってみた。

堂内を巡った後やはり疲れていたので礼拝用の席に座り、ここにやって来る参拝者を眺めたり

していた。その時ちょうど、昼の聖餐式（ミサ）が始まった。登壇したのは、ウィリアムズという黒人の牧師で、かなりの雄弁家だった。席を立つのもと思って、説教者の言葉にしばし耳を傾けた。

この教会は、北アメリカ大陸で最初の教区（parish）をもった教会で、古く 17 世紀にさか



写真4 かつてのWTCとトリニティー教会

copy rights trinitychurch org

のぼれること。イギリス国教会系の NY 市における首座教会であること。そう、教会の生い立ちに触れた後、牧師は 9 月 11 日のあの事件以来、時には不眠不休で、教会が一体となって救援活動に当たったこと。市の要請もあって WTC を背にするセント・ポール寺院では、復旧活動中の人々のために、身心両面に渡るケアと宗教による癒しを与えていることなどを、とうとうと喋った。そしていかにも牧師らしいと思ったが、「事件以来、この教会員は惨劇を忘れるために、仕事や遊びなどに向かうことが多かった。しかし今は、再び家庭に戻る時だ。地域に戻って足場を固める時なのだ！」と、一気にまくし立てて、説教を終えた。

一同がしーんとなったところで、聖餐式となりパンとワインをもらう場となったので、そーっと外に出た。振り返りて見上げると、ゴシック様式の塔が高くそびえていた。19 世紀に出来た現在

の会堂は、当時としてはロウアー・マンハッタンで最も高くそびえ、一時期は自由の女神と共に、外洋船が NY 市に入る時、その目標となる存在だったという。そうしたランドマークとしての役目を終えたのが、1970 年、辺りの高層ビルをも抜き出る二つの超高層をもった WTC の登場だったという。

アメリカ国民にとって重要な土地

ウォール街に行く。最初の角を曲がった所にある NY 証券取引所は、やはり一般公開せずとなっていた。そこではす向かいの、これもギリシア神殿風の正面をもつフェデラル・ホールに入る。アメリカ史に名を残す旧跡でもあり、一度は寄ってみたかった所だ。中に入った際、突然、普段では考えられない荷物検査を受けた。面食らうが、炭そ菌騒ぎも終わっていないこの国で、連邦政府が所有するビルに入るのだから仕方ないと納得した。中はこのホールの由来とアメリカ史についての博物館となっていた。

この地に最初に建てられたのは、NY 市の市庁舎で、当時は赤レンガの 2 階建てだったという。二百年前、アメリカは独立する。自由を尊び権力を嫌う新生国家の誕生は、強い政府を求める必然がなかった。首都を置くことにさえ反対論がある中で、そうは言ってもと商都ニューヨークの市民はここに仮の首都を招いた。NY 市選出の政治家、ジョン=ジェイやアレクサンダー=ハミルトンは強い連邦政府が必要と説いたフェデラリストとして有名である。彼らの尽力で連邦政府が出来、最初の大統領にジョージ=ワシントンが就いた。1789 年 3 月、連邦憲法を採択し、4 月に大統領就任式を執り行ったのも、このホールでのことだった。ホールの正面外側に大きなワシントン像が立っているのもうなずける。言論の自由を求めて英国王と闘ったピーター=ゼンガーがこの建物の 2 階に投獄されていたことと言い、この事と言い、アメリカという国の成立に関わった重要な通過点がこの地に多いのに気づく。

その 10 年前の 91 年春、やはり NY 市に來た。

この時もロウアー・マンハッタンに足を運んだ。滞在3日目の朝、バッテリー公園から自由の女神行きの船に乗った。と言っても、女神のあるリバティー島に下船せず、その船が帰り道に寄るエリス島に目的があったのだ。

エリス島(Ellis Island)のこと

ロウアー・マンハッタンとハドソン川を挟んで向かい合ったニュージャージー州よりも、わずか2haほどの小島、エリス島があった。ここは連邦政府の移民局が、1892年から1954年まで半世紀以上に渡り、アメリカに移民を受け入れて来た場所だ。現在アメリカに暮らす国民の4人に1人が、この地を通過した移民の子孫だと言われている。移民博物館として、再び訪問者を受け入れる施設となっていた。

欧州からやって来た移民たちは、大西洋を渡りニューヨーク湾へと入ると、まずは左手に自由の女神の歓迎を受けた。自分のルーツを断ち切り「約束された土地」=アメリカに渡って来た彼らは、一旦ロウアー・マンハッタンの波止場に到着する。しかし、上陸するには移民局の入国審査を受けねばならなかった。彼らは再度船に乗り、このエリス島にやって来た。

博物館となっている移民局本館に入る。ロビー中央には、旅行者が携行した大きな鞆と傘などが展示してあった。ここから先ず2階の入国検査所に上がってみた。天井が高くて広いホールの正面に、何列かの待合の椅子と検査官の机などが残されていた。ここにやって来た移民は、その出身や使える言語、家族や同伴者の有無を調べられる。英語を話せる人のほうが少なく通訳頼みで、さながら『聖書』に出てくる「バベルの塔」の例えのように、多様な言語が毎日飛び交っていたという。

入国者は法律面や健康面での審査を受けた。犯罪歴のある者や伝染病を抱えた者は、入国を制限された。幾ら自由の国とは言え、公益を損なう者は受け入れなかった。目の病気トラコーマの検査を受ける写真が印象に残った。持病をかかえて来た者、懐妊したまま来た母親などは、島内にある

病院に隔離され回復を待った。そして検査を通過した者だけが再びロウアー・マンハッタンに戻り、晴れてアメリカの大地を踏んだ。

そうした移民たちの出自とアメリカでの暮らしを紹介したコーナーもあった。ウクライナ(当時はロシア)のオデッサでポグロムと呼ばれる民族虐殺にあったユダヤ人の写真や、精悍な顔つきのラトビア人農夫の写真が印象的だった。彼らそして彼女らは、アメリカにこそ自由があるとやって来た。まさに希望の大地だったのだ。

一方、上陸して半年たち「元気でやっている」と故国に残した家族に宛てた便りや、先に入国し成功したと伝えて来た親戚を頼りにやって来たものの、それが真実ではないと知って落胆したと書かれた当時の手紙には、人生の悲喜こもごもを感じた。こうして一巡した後、再びホールに戻った。そこから海を越えて見るロウアー・マンハッタンは、ビルが林立し海上に浮かぶ島のようなようだった。景色を占めるのは、やはりWTCの二本のビルで、他はこれらに圧倒されるようだった…。

それを今思い出す時考えさせられるのは、何故自由の国アメリカが攻撃されるのか、ということだ。冷戦後に残された唯一の超大国とは言え、この国の成り立ちを知れば知るほど、抑圧されていると感じる人には救いであり希望の星であり続けて来た歴史をもつ国だ。その自由があるからこそ、自らの大国としての行き過ぎや黒人差別の矛盾には、内側に批判者をもち民主主義を機能させて来た国だ。その国が自分たちには抑圧者と見なす人々により、狙われる。やはり私にはそこに何かの無理を感じずにはいられない。

それにしても、このエリス島を含めロウアー・マンハッタンという土地は、アメリカにとって極めて重要な場所なのでは、と…、そう思う。

再びロウアー・マンハッタンへ

帰国の前日29日の朝、再びWTCの跡に行ってみることにした。この間ホテルのテレビで年末の様子を伝えるローカル・ニュースを見ていたが、広島爆心地を想起するグラウンド・ゼロと呼ば



写真5 星条旗たなびくウォール街

れていた WTC の跡から、目新しい動きは伝わって来なかった。例の「展望台」はできたのだろうか。それが、心に引っかかっていた。今度は地下鉄フルトン街&ブロードウェイの駅から直ぐ上に上がってみた。そこがちょうどセント・ポール寺院の脇だと知っていたから。

「展望台」はその日も工事中だった。黒人の女性警察官が立っていたので聞いてみた。彼女も詳しくは分からないが、明後日の大晦日になるのではと話していた。せっかく NY 市まで来たのだから見せてくれと頼みたかったが、それは無理だとわかっていた。結局、私が帰国した 30 日の日曜午前、この「展望台」は開設された。もちろんその日の朝、ケネディー空港に向けて旅立たねばならなかった私は、この「展望台」に立てないことが分かった。残念だった…。

展望台見学をあきらめたこの日、私は旅の疲れもあって多くの場所には立ち寄らなかった。先ず出かけたのはスタテン島へのフェリー乗り場だった。エリス島から見た WTC を思い出しあの島への船に乗って、ロウアー・マンハッタンのスカイラインがどう変わったか見てみようと思った。休暇が続くこの時期、その船に乗るには途方もない行列の最後尾につかねばならなかった。すぐに頭を切り替え乗船場に隣接するこのフェリー乗り場に来た。NY 市の 5 番目の区である対岸のスタテン島に渡るための船便である。海からの景色を眺めるのが目的だからこれで十分と思い、往復してみた。

最初の 10 分、最後の 10 分が必要な時だった。フェリーが岸壁を離れた時、船尾にいて振り返ると、だんだんと視野が広角になり、ロウアー・マンハッタンのビル群が左右に広がって来た。エリス島から眺めた WTC と比べ、今見通す方向はわずかにずれてはいる。しかし、もしあのビルがあったなら、前方左寄りにそれが周囲のビルを従えて建っているはずだ。それがない！

WTC が 100 階で地上 400m の高さなのに対し、ロウアー・マンハッタンのビルの多くは 50 階で 200m 前後というのがほとんどだ。だから何か風景に欠けていると感ずる。そんな思いに浸っていると、西側には先に紹介したエリス島、そして自由の女神がこちらを向いているリバティー島が迫って来る。近くをかすめ、そして遠ざかって行った。スタテン島からの帰路、今度は船の前方に陣取り、視野が段々と狭まっていく形で眺めた。平板なスカイラインには、WTC の幻影さえ見出すことはできなかった。

昼はグリニッジ・ヴィレッジの寿司屋 Blue Ribbon で前から食べたかった大西洋産の握りを賞味した。おいしかった。旅のささやかな楽しみだった。そして師走の風景を再びミッドタウンの繁華街に見に行く。せめて子供たちへの土産位と思っていたこともあった。午後遅くブロードウェイを 34 丁目のヘラルド・スクエアから上ってみる。沿道はすごい人だ。買い物袋をたくさん持った人も多い。タイムズ・スクエア近く、開店して間もないおもちゃの巨大店舗「トイザラス」の前には行列が出来、聞いて見ると 2 時間待ちだという。それを聞いてあきらめた。結局この後 5 番街に回り、こちらもごった返していたディズニー・ストアで子供のプレゼントを買い、ホテルに早々と戻ることにした。

年末の光景を見て私が感じたのは、やはりアメリカ人はどこかおめでたいところがある。大陸的な鷹揚さもあって、それは危機に強い。タフで前向きな生き方につながる、という事だ。いまだ炭そ菌騒ぎも終わっていないのに、つい先日までマ



写真6 晩のタイムズ・スクエアで

ンハッタンのあちこちで葬式ラッシュだったと言うのに、どこからこの楽天的な性格が生まれるのだろう。日本に帰国した日、新聞にはアメリカの個人消費が盛り返したという記事を見つけた。

旅の終わりに

最初に WTC 跡に出かけた 27 日の晩、芸術の殿堂と言われるリンカーン・センターから、地下鉄に乗り足早にホテルに帰って来た。10 年前の旅では、さすがに地下鉄の落書きは消えていたが、夜遅くにこれを利用するには勇気が必要だった。あれから 10 年、NY 市は大きく変貌した。何より治安が良くなった。当時、この街の大学にいた I 君と話した時、ハーレムを見下ろす自宅の寝室に深夜銃弾が飛び込んだと聞いて本当に驚いたのを覚えている。当時は黒人のディンキンズ市長の時代だったが、治安回復は現在のイタリア系、ジュリアーニ市長に任された。そのジュリアーニ市長は見事に安全な NY 市を復活させ、時代

も好景気に沸いた。退任を前にして彼の業績は同じくイタリア系の名物市長、空港に名を遺すラガーディア氏に並ぶという。

テレビをつけたら大晦日に退任するそのジュリアーニ氏が出ていた。その日の午前、あの現場に近いセント・ポール寺院で、彼の退任演説があったというニュースだった。同時多発テロの際も、任期途中で罹ったガンを克服した不屈の精神で、彼は一旦は絶望に瀕したこの町を、復興させるため尽力した。しかも、そんな時もユーモアを忘れずに…。WTC の再建案に触れた際、ジュリアーニ市長はこう語ったという。「遺族のためにも、再建はビジネスの観点から考えるべきではない。高くそびえ、記念になる、美しいモニュメントをつくるべきだ」と。

二つの「展望台」を手がかりに、旅の中と後で考えたことをまとめてみた。おそらく、21 世紀の歴史は、この事件を「幕開け」と書くことになるだろう。そうした現場に立てたのが何よりだった。

<了>